●狛江市民活動・生活情報誌●　毎月1日に発行します　第65号　狛江市発行　Monthly わっこ　No.65　2009年1月1日発行

Monthly Wacco わっこ

2009 平成21年 1

発　行 ●狛江市地域活性課
〒201-8585 狛江市和泉本町 1-1-5
☎3430-1111 FAX3430-6870
Email=wacco@city.komae.lg.jp
編集・制作 ●特定非営利活動法人 k-press
〒201-0012 狛江市中和泉 3-2-16 プランツベルツ 201
☎3430-6617 FAX3430-6743
Email=wacco@k-press.net

誌面に掲載した記事・写真等の無断複製・転載等はお断りします。
お問い合わせ・ご意見は狛江市地域活性課へ

新しい年の幸せ願い 数々の行事守り伝える

正月の行事

まえの今昔ルポ

1月は、その年の幸せを願ってさまざまな行事が催される。都市化によって薄れたとはいえ、狛江でも、農村地帯だったころからの数多くの行事や風習がそれぞれの家や地域で大切に守り伝えられている。

狛江市国際交流協会が外国人に日本の正月を味わってもらおうと催した交流会。茶道などのほか、江戸時代に流行した遊び、投扇興も行われ、参加した人たちを喜ばせた。

1,000個も組み立てた玉飾り

飯田賢二さん（63歳・中和泉）の話
父の代から建築業をやっていて、「北多摩睦（むつみ）消防組第二区五番組」に入っています。父が正月飾りを作って狛江駅の周辺で売っていましたが、それを受け継いで続けています。正月飾りを「ガサ」と呼び、作って売るのはとび職だけに許された仕事でした。15歳ぐらいから父の手伝いをしましたが、当時は、ウラジロが乾かないようにするため、玉飾りを3、4日間で多いときは1,000個も組み立てるので夜遅くまで働きました。また、配達もしたので、バイクや自転車で届けなくてはならず、特に28日と30日は目の回るような忙しさでした。いま正月飾りを手作りしているのは、市内ではうちだけになってしまいました。スーパーなどでも正月飾りが買えるようになったので、売る数は減りましたが、妻が飾りなどを工夫してかわいらしく仕立てたもの（**写真右**）は人気があります。

たいへんだった正月の準備

冨永直子さん（82歳・西野川）の話
私は昭和23年に嫁（よめ）にきましたが、当時はお正月の準備がたいへんでした。モチつきですが、「九日モチ」は縁起がよくないというので避けました。「エイ仕事」といって、田植えなどを助け合う家が5、6軒あり、その家同士で話し合って日を決めてお互いに手伝いました。4斗だる4、5杯分の米をつくほか、アワやキビなどのモチもつきました。モチをつくのはほとんど男がやり、女はつき上がったモチをのすのが役目でした。たいへんなのは、前日にモチ米を洗ったりする準備で、これは女の仕事でした。野川の洗い場へ持っていき、洗ってから朝まで水につけておきます。ただ、米の量が多いので、ひと晩がかりでした。翌日、モチを切るのですが、これも女の仕事でした。この付近では「切る」と言わないで「タテル」と言っていました。モチの切れ端はひなまつりのあられにしました。

25日には、男が布田（調布市）の天神様へ出かけて、神棚に飾る御神酒（おみき）どっくりやしめ縄を買ってきました。

正月の3が日は男が雑煮などの料理を作りました。ただ、おせち料理や雑煮の材料は暮れのうちに女が用意します。神棚をまつったりするのも男の役目でした。

ゆでた大根も神様に供えました。

15日と16日の「藪入り」は家で働いていた人の休みでしたが、嫁はこの日の前後に、実家へひと晩帰してもらえました。このとき舅（しゅうと）からおこずかいを新しいお札でもらいましたが、すごくうれしかったです。

「エイ仕事」によるモチつきは昭和40年ごろまでやったと思いますが、昔は暮れから正月にかけて女はすごく忙しくて、いまはほんとうに楽になりましたね。

駒井町の米店を悪魔払いに訪れた駒井はやしの一行

地域の家回った「悪魔払い」

高橋晟さん（79歳・駒井町）の話　戦後の食糧増産が落ち着いたころ、明治から続いていた地元の「駒井はやし連」が復活し、私は昭和30年ごろに入って練習し、祭りなどで披露していました。当時の仲間が、正月にお囃子（はやし）に合わせて獅子が踊ってまわる縁起物の「悪魔払い」のことをどこかから聞いてきました。古くなった獅子頭、笛、太鼓などの道具を買い換える資金を作ろうと、35年ごろから始めました。10数人が1月2日に氏神様の日枝神社に集まり、神社に獅子舞を奉納してから、駒井町の各家を回って角付けをしました。前の年に不幸があった家を除いた、町内の家をくまなく回ろうと1日30軒ぐらいずつ、3、4日間かけて回りました。踊り手は獅子と馬鹿面（ひょっとこ）、囃子方は笛、鉦（かね）、太鼓の3人で、太鼓は外を回るときに使う横からたたくものと、桶胴（おけどう）太鼓の2つを使いました。舞い手やお囃子は途中で交代しました。ほとんどは庭や玄関先ですが、座敷でも演じました。料理や酒を勧められることもあって、ひと口のつもりがつい長居して飲み過ぎ、笛が吹けなくなったりしたこともあります。だんだん人気が出てきて、正月に新宿・百人町まで呼ばれて行きました。もらったご祝儀を貯めて、数年後には道具を新しいものに買い換えました。

雪の残る中で太鼓をたたく駒井はやし連の悪魔払い

地域外からも招かれる人気

大津勲さん（62歳・駒井町）・秋元賢さん（59歳・駒井町）の話　地元の「駒井ばやし」に入りたいとはやし連の人に話したら、5人以上集まったら教えると言われ、近所の仲間を集めて、20歳代の半ばから始めました。入って2、3年後ですが、道具が傷んでいるものがあり、予備の楽器を買うため、指導してくれる先生や先輩と相談して、53年の正月に、中断していた悪魔払いを始めました。私たちは歩いて回りましたが、父の話では、昔はリヤカーに道具を載せて回ったそうです。普通はぞうりですが、雪の降った時はゲタを履きました。寒いときは指先を切った軍手で笛を吹いたこともあります。縁起が良いというので、時間を指定して座敷に呼ぶ家も出てきて、予定通りに回るのに苦労したこともあります。市内では珍しかったせいか、駒井町のほかにも、新築した家やお寺に呼ばれて行ったことも多かったです。仲間の家が交代で「宿」になり、昼ご飯や晩ご飯をみんなで一緒に食べるのが、楽しかったです。途中休んだ年もあったかもしれませんが、58年まで続きました。保存会が結成されてからはやらなくなったと思います。

正月に「初荷」などと記した旗を立て肥料を積んで横浜の工場から到着したトラックを総出で出迎える狛江農協の職員たち（写真右）。トラックの行列（写真左）は農協前から銀行町を経て岩戸まで続き、街の人を驚かせた。この初荷は、肥料を割安で農家へ届けるため都経済連が企画、トラックを総動員し都下で一斉に実施された。

熟練がいるまとい振り

藤原健次さん（49歳・中和泉）の話
土建業の会社をやっていますが、約20年前に同業者に誘われて「北多摩睦消防組第二区五番組」（小川国利組長）に入りました。五番組は昭和30年に二区一番組から分かれて結成され、現在、狛江市と調布市の神代地区のとび職や土建業の人たち15人が江戸火消しの文化を守り伝えています。正月は毎年、消防団の出初め式に参加するほか、お寺の行事や結婚式などの祝い事に招かれることもあります。私も28歳から木遣（きや）りをうたったり、まといを振っています。長さ約2.2mあるまといの先についている「まと」は漆喰（しっくい）でできていて、その下に下がっている「ばれん」と呼ぶ、たくさんの帯は馬の皮に漆喰が塗ってあります。重さが15kgぐらいあるので、振り回すのは体力が要ります。毎年暮れに2、3回集まってまとい振りの練習をします。ばれんがきれいに広がるように振るにはけっこう熟練が必要で、慣れないうちは倒しそうになったこともあります。まといを振る「振り子」は本来「道具持」の役目なんですが、後継者がなかなか入ってこないので、私も毎年振っています。

写真提供・取材協力=冨永直子、高橋晟、藤原健次、飯田賢二、大津勲、秋元賢、勝瀬澄子、木下和信、マインズ農業協同組合（順不同・敬称略）**資料**=『狛江の民俗Ⅳ』(狛江市)、『狛江市農業協同組合史』（狛江市農業協同組合）、『北睦五十年の歩み』(北多摩睦消防組)